

## ADIABATIC LIMITS, THETA FUNCTIONS, AND GEOMETRIC QUANTIZATION (ANNOUNCEMENT)

吉田尚彦  
 明治大学理工学部数学科  
 TAKAHIKO YOSHIDA  
 DEPARTMENT OF MATHEMATICS, SCHOOL OF SCIENCE AND TECHNOLOGY  
 MELJI UNIVERSITY

### 1. INTRODUCTION

Lagrange fibration の幾何学的量子化において,  $\text{Spin}^c$  Dirac 作用素の指数と Bohr-Sommerfeld ファイバーと呼ばれる離散的に現れるファイバーの個数とが一致する現象が, 様々な例で確認されている [1, 5, 7, 8, 9, 11, 12, 13, 18, 10, 14, 15]. これについて, ある条件の下, 非特異 Lagrange fibration (つまり, Lagrange ファイバー束) に対して, Bohr-Sommerfeld 点で添え字づけられた正則切断の族で

- (1) 正則切断の空間の基底をなし,
- (2) 各々の切断のサポートは, 断熱極限の下で, 対応する Bohr-Sommerfeld 点の周りに集中する

ようなものが構成できたので, 論文 [17] にまとめている. 本稿はこの論文 [17] の予報である. [17] では本稿の内容よりも一般的な状況も論じる予定である.

### 2. LAGRANGE ファイバー束

2.1. 整アファイン構造.  $(M, \omega)$  をシンプレクティック多様体とする.

**定義 2.1.**  $(M, \omega)$  を全空間とするファイバー束  $\pi: (M, \omega) \rightarrow B$  で, ファイバーが Lagrange 部分多様体であるようなものを **Lagrange ファイバー束** とよぶ.

**例 2.2.**  $n$  次元トーラス  $T^n = (\mathbb{R}/\mathbb{Z})^n$  の余接束の全空間  $(\mathbb{R}^n \times T^n, \sum_i dx_i \wedge dy_i)$  から  $\mathbb{R}^n$  への射影  $\pi: (\mathbb{R}^n \times T^n, \sum_i dx_i \wedge dy_i) \rightarrow \mathbb{R}^n$  は Lagrange ファイバー束である. ここで,  $x_i$  は  $\mathbb{R}^n$  方向の,  $y_i$  は  $T^n$  方向の標準的な座標とする.

例 2.2 は, Lagrange ファイバー束の局所モデルを与える.

**定理 2.3** (Arnold-Liouville の定理 [2]). ファイバーがコンパクト, 弧状連結であるような Lagrange ファイバー束は, 局所的には例 2.2 の  $(\mathbb{R}^n \times T^n, \sum_i dx_i \wedge dy_i) \rightarrow \mathbb{R}^n$  と同一視できる.

以下では断らない限り, Lagrange ファイバー束は全てファイバーがコンパクト, 弧状連結と仮定する.

**定義 2.4.** Lagrange ファイバー束  $\pi: (M, \omega) \rightarrow B$  の切断  $u$  で  $u^*\omega = 0$  となるものを **Lagrange 切断** とよぶ.

**補題 2.5.**  $\psi: (\mathbb{R}^n \times T^n, \sum_i dx_i \wedge dy_i) \rightarrow (\mathbb{R}^n \times T^n, \sum_i dx_i \wedge dy_i)$  を例 2.2 の Lagrange ファイバー束  $\pi: (\mathbb{R}^n \times T^n, \sum_i dx_i \wedge dy_i) \rightarrow \mathbb{R}^n$  のファイバーを保つシンプレクティック同相とする. このとき, 行列  $A \in \text{GL}_n(\mathbb{Z})$ , 定数  $c \in \mathbb{R}^n$  と  $\pi$  の Lagrange 切断  $u: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n \times T^n: x \mapsto (x, \tilde{u}(x))$  が存在して,  $\psi$  は

$$\psi(x, y) = (Ax + c, {}^t A^{-1}y + \tilde{u}(x))$$

と表せる.

特に、補題 2.5 から次のことが分かる。

**命題 2.6.**  $\pi: (M^{2n}, \omega) \rightarrow B^n$  を Lagrange ファイバー束とする。このとき、 $B$  の座標近傍系  $\{(U_\alpha, \varphi_\alpha)\}_{\alpha \in A}$  と各  $\alpha \in A$  に対してシンプレクティック同相  $\psi_\alpha: (\pi^{-1}(U_\alpha), \omega|_{\pi^{-1}(U_\alpha)}) \rightarrow (\varphi_\alpha(U_\alpha) \times T^n, \sum_i dx_i \wedge dy_i)$  で次の図式が可換になるようなものがある

$$\begin{array}{ccc} (\pi^{-1}(U_\alpha), \omega|_{\pi^{-1}(U_\alpha)}) & \xrightarrow{\psi_\alpha} & (\varphi_\alpha(U_\alpha) \times T^n, \sum_i dx_i \wedge dy_i) \\ \downarrow \pi & & \downarrow \\ U_\alpha & \xrightarrow{\varphi_\alpha} & \varphi_\alpha(U_\alpha). \end{array}$$

さらに、各  $U_\alpha \cap U_\beta$  上の局所定数な写像  $A_{\alpha\beta}: U_\alpha \cap U_\beta \rightarrow \mathrm{GL}_n(\mathbb{Z})$ ,  $c_{\alpha\beta}: U_\alpha \cap U_\beta \rightarrow \mathbb{R}^n$  と Lagrange 切断  $u_{\alpha\beta}: \varphi_\alpha(U_\alpha \cap U_\beta) \rightarrow (\varphi_\alpha(U_\alpha \cap U_\beta) \times T^n, \sum_i dx_i \wedge dy_i)$  が存在して、

$$\psi_\alpha \circ \psi_\beta^{-1}(x, y) = \left( A_{\alpha\beta}x + c_{\alpha\beta}, {}^t A_{\alpha\beta}^{-1}y + u_{\alpha\beta}(\varphi_\alpha \circ \varphi_\beta^{-1}(x)) \right)$$

とかける。

**定義 2.7.** 命題 2.6 の  $B$  の座標近傍系  $\{(U_\alpha, \varphi_\alpha)\}$  を整アファイン構造とよび、多様体と整アファイン構造の組を整アファイン多様体とよぶ。

**例 2.8.** (1)  $a_1, \dots, a_n$  を実線型空間  $\mathbb{R}^n$  の基底とする。このとき、 $\mathbb{Z}^n$  の  $\mathbb{R}^n$  への作用

$$\phi_\gamma(x) = x + \sum_{i=1}^n \gamma_i a_i \quad (\gamma \in \mathbb{Z}^n, x \in \mathbb{R}^n)$$

による商空間  $\mathbb{R}^n / \mathbb{Z}^n$  には、整アファイン構造が入る。この商空間は位相的には  $T^n$  である。

(2)  $n$  を自然数、 $a, b$  をともに正の実数とする。このとき、 $\mathbb{Z}^2$  の  $\mathbb{R}^2$  への作用を

$$\phi_{e_1}(x) := x + \begin{pmatrix} a \\ 0 \end{pmatrix}, \quad \phi_{e_2}(x) := \begin{pmatrix} 1 & n \\ 0 & 1 \end{pmatrix} x + \begin{pmatrix} 0 \\ b \end{pmatrix} \quad (x \in \mathbb{R}^2)$$

で定める。ここで、 $e_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ ,  $e_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  とする。この作用の商空間には、整アファイン構造が入る。この商空間は位相的には  $T^2$  であるが、この作用から誘導される整アファイン構造は (1) のものとは同型でないことが Mishachev によって知られている [16, Theorem A].

(3)  $m, n \in \mathbb{Z}^3$  に対して、積  $m \cdot n \in \mathbb{Z}^3$  を

$$m \cdot n := \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -1 \\ 0 & -1 & 0 \end{pmatrix}^{m_1} \begin{pmatrix} n_1 \\ n_2 \\ n_3 \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} m_1 \\ m_2 \\ m_3 \end{pmatrix}$$

で定める。 $\mathbb{Z}^3$  は積  $\cdot$  に関して、非可換な群になる。次に、群  $(\mathbb{Z}^3, \cdot)$  の  $\mathbb{R}^3$  への作用を

$$\phi_n(x) := \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -1 \\ 0 & -1 & 0 \end{pmatrix}^{n_1} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} n_1 \\ n_2 \\ n_3 \end{pmatrix} \quad (n \in (\mathbb{Z}^3, \cdot), x \in \mathbb{R}^3)$$

で定めると、商空間には整アファイン構造が入る。

(4)  $l, m \in \mathbb{Z}^n$  に対して、積  $l \cdot m \in \mathbb{Z}^n$  を

$$l \cdot m := \begin{pmatrix} 1 & & & \\ & (-1)^{l_1} & & \\ & & \ddots & \\ & & & (-1)^{l_{n-1}} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} m_1 \\ \vdots \\ m_n \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} l_1 \\ \vdots \\ l_n \end{pmatrix}$$

で定める.  $\mathbb{Z}^n$  は積・に関して非可換な群になる. 次に, 群  $(\mathbb{Z}^n, \cdot)$  の  $\mathbb{R}^n$  への作用を

$$\phi_m(x) := \begin{pmatrix} 1 & & & \\ & (-1)^{m_1} & & \\ & & \ddots & \\ & & & (-1)^{m_{n-1}} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} m_1 \\ \vdots \\ m_n \end{pmatrix} \quad (m \in (\mathbb{Z}^n, \cdot), x \in \mathbb{R}^n)$$

で定めると, 商空間には整アフィン構造が入る.  $n = 2$  の時, この商空間はクラインの壺である.

(5) 整数  $\lambda_1, \dots, \lambda_{n-1} \in \mathbb{Z}$  に対して,  $\mathbb{Z}^n$  の積を

$$\gamma' \cdot \gamma := \begin{pmatrix} 1 & \lambda_1 & & & \\ & 1 & \lambda_2 & & \\ & & \ddots & \ddots & \\ & & & 1 & \lambda_{n-1} \\ & & & & 1 \end{pmatrix}^{\gamma'_n} \begin{pmatrix} \gamma_1 \\ \vdots \\ \gamma_n \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} \gamma'_1 \\ \vdots \\ \gamma'_n \end{pmatrix} \quad (\gamma', \gamma \in \mathbb{Z}^n)$$

で定める.  $\mathbb{Z}^n$  は積・に関して非可換な群になる. 次に, 群  $(\mathbb{Z}^n, \cdot)$  の  $\mathbb{R}^n$  への作用を

$$\phi_\gamma(x) := \begin{pmatrix} 1 & \lambda_1 & & & \\ & 1 & \lambda_2 & & \\ & & \ddots & \ddots & \\ & & & 1 & \lambda_{n-1} \\ & & & & 1 \end{pmatrix}^{\gamma_n} \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} \gamma_1 \\ \vdots \\ \gamma_n \end{pmatrix} \quad (\gamma \in (\mathbb{Z}^n, \cdot), x \in \mathbb{R}^n)$$

で定めると, 商空間には整アフィン構造が入る.

**命題 2.9.**  $B$  を多様体とする.  $B$  が Lagrange ファイバー束の底空間であるための必要充分条件は,  $B$  が整アフィン構造を許容することである.

**2.2. Developing map と completeness.**  $\pi: (M^{2n}, \omega) \rightarrow B^n$  を Lagrange ファイバー束,  $p: \tilde{B} \rightarrow B$  を  $B$  の普遍被覆とする.  $\Gamma := \pi_1(B)$  とおくと,  $\tilde{B}$  への  $\Gamma$  作用の  $p^*(M, \omega) \rightarrow \tilde{B}$  への持ち上げが存在する. このとき, 次が知られている.

**命題 2.10.**  $\mathbb{R}^n$  の開集合  $O$ ,  $O$  上の Lagrange ファイバー束  $(\tilde{M}, \tilde{\omega}) \rightarrow O$ ,  $\tilde{B}$  から  $O$  への全射はめ込み  $\text{dev}: \tilde{B} \rightarrow O \subset \mathbb{R}^n$ , 及び  $p^*(M, \omega)$  から  $(\tilde{M}, \tilde{\omega})$  へのファイバーを保つシンプレクティック同相写像  $\widetilde{\text{dev}}: p^*(M, \omega) \rightarrow (\tilde{M}, \tilde{\omega})$  で  $\text{dev}$  をカバーするものが存在する. さらに,  $\Gamma$  の  $\mathbb{R}^n$  への整アフィン作用  $\phi \in \text{Hom}(\Gamma, \text{GL}_n(\mathbb{Z}) \ltimes \mathbb{R}^n)$  と  $\Gamma$  の  $(\tilde{M}, \tilde{\omega})$  への作用  $\varphi$  が存在し, 次が成り立つ.

- (1)  $\phi$  は  $O$  を保つ.
- (2)  $\varphi$  は  $\phi$  をカバーする.
- (3)  $\text{dev}$  と  $\widetilde{\text{dev}}$  は  $\Gamma$  同変写像.

**定義 2.11.**  $\text{dev}: \tilde{B} \rightarrow B$  を **developing map** とよぶ. また,  $\tilde{B}$  と  $\mathbb{R}^n$  が整アフィン多様体として同型であるとき<sup>1</sup>,  $B$  は **complete** であるという.

**例 2.12.** 例 2.8 にある整アフィン多様体は全て complete である.

**例 2.13** (complete でない整アフィン多様体の例).  $\mathbb{Z}/4\mathbb{Z} = \{\pm 1, \pm\sqrt{-1}\}$  の  $\mathbb{C}^n \setminus \{0\}$  への自然な作用による商空間は整アフィン多様体であるが<sup>2</sup>,  $n \geq 2$  の場合は complete でない.

Bieberbach の定理 [3, 4] より, 次が従う.

**命題 2.14.**  $B$  がコンパクトな平坦 Riemann 多様体ならば, complete である.

<sup>1</sup>このとき,  $O = \mathbb{R}^n$  で,  $\text{dev}$  は  $\tilde{B}$  から  $\mathbb{R}^n$  への, 整アフィン多様体としての同型を与えることが知られている

Duistermaat による Lagrange ファイバー束の分類定理 [6] により, 次が分かる.

**補題 2.15.**  $B$  が complete ならば,  $(\widetilde{M}, \widetilde{\omega}) = (\mathbb{R}^n \times T^n, \sum_i dx_i \wedge dy_i)$  ととることができ,  $\widetilde{\text{dev}}$  は  $p^*(M, \omega) \rightarrow \widetilde{B}$  から  $(\mathbb{R}^n \times T^n, \sum_i dx_i \wedge dy_i) \rightarrow \mathbb{R}^n$  へのファイバーを保つシンプレクティック同相写像で  $\text{dev}$  をカバーする.

$(L, \nabla) \rightarrow (M, \omega)$  を前量子化束とする.  $(L, \nabla)$  の  $p^*(M, \omega)$  への引き戻しも  $p^*(L, \nabla)$  と表すことにする. 定義より,  $p^*(M, \omega)$  への  $\Gamma$  作用の  $p^*(L, \nabla)$  への持ち上げが存在する.

**補題 2.16.**  $B$  は complete とする. このとき,  $p^*(L, \nabla)$  から  $(\mathbb{R}^n \times T^n \times \mathbb{C}, d - 2\pi\sqrt{-1}\sum_{i=1}^n x_i dy_i)$  への束同型で  $\widetilde{\text{dev}}$  をカバーするものが存在する.

**注 2.17.** 補題 2.16 この同一視の下,  $\Gamma$  の  $(\mathbb{R}^n \times T^n \times \mathbb{C}, d - 2\pi\sqrt{-1}\sum_{i=1}^n x_i dy_i)$  への作用を  $\tilde{\varphi}$  で表すことにする.

以上, まとめると次のようになる.

**定理 2.18.**  $B$  が complete ならば, 前量子化束付き Lagrange ファイバー束  $(L, \nabla) \rightarrow (M, \omega) \rightarrow B$  は,  $(\mathbb{R}^n \times T^n \times \mathbb{C}, d - 2\pi\sqrt{-1}\sum_{i=1}^n x_i dy_i) \rightarrow (\mathbb{R}^n \times T^n, \sum_i dx_i \wedge dy_i) \rightarrow \mathbb{R}^n$  を  $\Gamma$  作用でわった商空間として得られる.

### 3. 主定理

**3.1. Bohr-Sommerfeld 点.**  $\pi: (M^{2n}, \omega) \rightarrow B^n$  を Lagrange ファイバー束,  $(L, \nabla) \rightarrow (M^{2n}, \omega)$  を前量子化束とする.

**定義 3.1.**  $b \in B$  が Bohr-Sommerfeld であるとは,  $(L, \nabla)|_{\pi^{-1}(b)} \rightarrow \pi^{-1}(b)$  が非自明な平行切断を許容するときをいう.

以下では,  $B$  は complete と仮定する. また,  $N$  を自然数とする.

$$\begin{aligned} (\widetilde{M}, \widetilde{\omega}) &:= (\mathbb{R}^n \times T^n, \sum_i dx_i \wedge dy_i) \\ (\widetilde{L}, \widetilde{\nabla}) &:= (\mathbb{R}^n \times T^n \times \mathbb{C}, d - 2\pi\sqrt{-1}\sum_{i=1}^n x_i dy_i) \end{aligned}$$

とおくと, 定理 2.18 から,  $(L, \nabla)^{\otimes N} \rightarrow (M, N\omega) \rightarrow B$  は  $(\widetilde{L}, \widetilde{\nabla})^{\otimes N} \rightarrow (\widetilde{M}, N\widetilde{\omega}) \rightarrow \widetilde{B} \cong \mathbb{R}^n$  への  $\Gamma := \pi_1(B)$  作用による商空間として得られる. このとき,

**命題 3.2.**  $x \in \mathbb{R}^n$  が  $(\widetilde{L}, \widetilde{\nabla})^{\otimes N} \rightarrow (\widetilde{M}, N\widetilde{\omega}) \rightarrow \mathbb{R}^n$  の Bohr-Sommerfeld 点である為には,  $x \in \frac{1}{N}\mathbb{Z}^n$  であることが必要十分である. 特に,  $\mathbb{R}^n$  への  $\Gamma$  作用の基本領域を  $F$ ,  $(L, \nabla)^{\otimes N} \rightarrow (M, N\omega) \rightarrow B$  の Bohr-Sommerfeld 点全体のなす集合を  $B_{BS}$  とすると,  $F \cap \frac{1}{N}\mathbb{Z}^n$  と  $B_{BS}$  は一対一に対応する.

**3.2. 概複素構造.** 定理 2.18 より,  $N\omega$  と整合的な  $(M, N\omega)$  の概複素構造は  $N\widetilde{\omega}$  と整合的な  $(\widetilde{M}, N\widetilde{\omega})$  上の  $\Gamma$  同変概複素構造と一対一に対応する. ここで,

$$\mathcal{S} := \{Z = X + \sqrt{-1}Y \in M_n(\mathbb{C}) \mid X, Y \in M_n(\mathbb{R}), {}^t Z = Z, Y \text{ は正定値}\}$$

とすると ( $\mathcal{S}$  を Siegel 上半空間という),  $C^\infty(\widetilde{M}, \mathcal{S})$  と  $(\widetilde{M}, N\widetilde{\omega})$  上の  $N\widetilde{\omega}$  と整合的な概複素構造全体の集合は, 対応

$$C^\infty(\widetilde{M}, \mathcal{S}) \ni Z \mapsto J_Z := \begin{pmatrix} XY^{-1} & -Y - XY^{-1}X \\ Y^{-1} & -Y^{-1}X \end{pmatrix} : T_{(x,y)}\widetilde{M} = T_x\mathbb{R}^n \oplus T_yT^n \circlearrowright$$

で一対一に対応することが知られている.

3.3.  $\Gamma$  作用. 定理 2.18 から,  $(L, \nabla)^{\otimes N} \rightarrow (M, N\omega) \rightarrow B$  は  $(\tilde{L}, \tilde{\nabla})^{\otimes N} \rightarrow (\tilde{M}, N\tilde{\omega}) \rightarrow \tilde{B}$  への  $\Gamma := \pi_1(B)$  作用による商空間として得られる. そこで,  $\tilde{B}$ ,  $(\tilde{M}, \tilde{\omega})$ ,  $(\tilde{L}, \tilde{\nabla})$  への  $\Gamma$  作用を,  $\gamma \in \Gamma$  に対してそれぞれ  $\phi_\gamma$ ,  $\varphi_\gamma$ ,  $\tilde{\varphi}_\gamma$  とすると, 補題 2.5 より,  $A_\gamma \in \mathrm{GL}_n(\mathbb{Z})$ ,  $c_\gamma \in \mathbb{R}^n$ , 及び Lagrange 切斷  $u_\gamma$  が存在して,  $\varphi_\gamma$  と  $\phi_\gamma$  はそれぞれ

$$\phi_\gamma(x) = A_\gamma x + c_\gamma, \quad \varphi_\gamma(x, y) = (\phi_\gamma(x), {}^t A_\gamma^{-1} y + u_\gamma(x))$$

と表せる. このとき,

**補題 3.3.**  $Z \in C^\infty(\tilde{M}, \mathcal{S})$  に対応する  $(\tilde{M}, N\tilde{\omega})$  上の  $N\tilde{\omega}$  と整合的な概複素構造  $J_Z$  が  $\Gamma$  作用で保たれる為には,

$$\begin{cases} XY^{-1}A_\gamma - (Y + XY^{-1}X)Du_\gamma = A_\gamma XY^{-1} \\ (Y + XY^{-1}X){}^t A_\gamma^{-1} = A_\gamma(Y + XY^{-1}X) \\ Y^{-1}A_\gamma - Y^{-1}XDu_\gamma = Du_\gamma XY^{-1} + {}^t A_\gamma^{-1} Y^{-1} \\ Y^{-1}X{}^t A_\gamma^{-1} = Du_\gamma(Y + XY^{-1}X) + {}^t A_\gamma^{-1} Y^{-1} X \end{cases}$$

が成り立つことが必要十分である. ここで,  $Du_\gamma$  は  $u_\gamma$  のヤコビ行列である.

また,  $\tilde{\varphi}_\gamma$  については, 直接計算により次が分かる.

**補題 3.4.** 各  $\gamma \in \Gamma$  に対して,  $\tilde{\varphi}_\gamma$  が  $\tilde{\nabla}$  を保つ為には,  $c_\gamma \in \frac{1}{N}\mathbb{Z}^n$  であることが必要十分である. またこのとき,  $\tilde{\varphi}_\gamma$  は

$$\tilde{\varphi}_\gamma(x, y, w) = \left( \varphi_\gamma(x, y), g_\gamma \exp 2\pi\sqrt{-1}N \left[ \frac{1}{2} {}^t x ({}^t Du_\gamma A_\gamma) x + {}^t x {}^t Du_\gamma c_\gamma + {}^t (A_\gamma^{-1} c_\gamma) y \right] w \right)$$

$((x, y, w) \in \tilde{L})$  と表せる. ここで,  $g_\gamma$  は  $g \in \mathrm{Hom}(\Gamma, \mathbb{C}^\times)$  の  $\gamma$  における値である.

3.4. 主定理.  $(L, \nabla) \rightarrow (M, \omega) \rightarrow B$  を前量子化束付き Lagrange ファイバー束,  $N$  を自然数とする. また,  $J$  を  $N\omega$  と整合的な  $(M, N\omega)$  の概複素構造とする. 次が成り立つ.

**定理 3.5.**  $B$  は complete であると仮定する. また,  $J$  の  $(\tilde{M}, \tilde{\omega})$  への引き戻しに対応する  $Z \in C^\infty(\tilde{M}, \mathcal{S})$  は定値写像であると仮定する<sup>2</sup>. このとき, 各  $\frac{m}{N} \in F \cap \frac{1}{N}\mathbb{Z}^n$  に対して,  $L$  の切斷  $\vartheta_{\frac{m}{N}}$  を

$$\begin{aligned} \vartheta_{\frac{m}{N}}(x, y) := & \sum_{\gamma \in \Gamma} g_\gamma \exp \pi\sqrt{-1}N \left[ -\frac{t}{N} m (\Omega + {}^t A_\gamma Du_\gamma) \frac{m}{N} \right. \\ & + {}^t \left( \phi_{\gamma^{-1}}(x) - \frac{m}{N} \right) (\Omega + {}^t A_\gamma Du_\gamma) \left( \phi_{\gamma^{-1}}(x) - \frac{m}{N} \right) \\ & \left. - 2 \frac{t}{N} m {}^t A_\gamma u_\gamma(0) - 2 {}^t c_\gamma u_\gamma(0) + 2 {}^t \phi_\gamma \left( \frac{m}{N} \right) y \right] \end{aligned}$$

と定義すると, 全ての  $g_\gamma$  のノルムが  $|g_\gamma| < 1$  ならば  $\vartheta_{\frac{m}{N}}$  は  $L$  の正則切斷であり,  $\{\vartheta_{\frac{m}{N}}\}_{\frac{m}{N} \in F \cap \frac{1}{N}\mathbb{Z}^n}$  は  $H^0(M; \mathcal{O}_L)$  の基底をなす.

定理 3.5 の証明の概要を述べる. 定理 2.18 より,  $(M, \omega)$  の概複素構造に付随した  $L$  係数  $\mathrm{Spin}^c$  Dirac 作用素の核に含まれる  $L$  の切斷を求めるためには,  $(\tilde{L}, \tilde{\nabla}) \rightarrow (\tilde{M}, \tilde{\omega}) \rightarrow \tilde{B}$  上で同様の問題の  $\Gamma$  同変版を考えればよい. そこで,  $(\tilde{L}, \tilde{\nabla}) \rightarrow (\tilde{M}, \tilde{\omega}) \rightarrow \tilde{B}$  上で微分方程式を解き,  $\Gamma$  同変という条件を考慮すると,  $\vartheta_{\frac{m}{N}}$  が得られる.

**注 3.6.** 定理 3.5 における概複素構造についての仮定があると,  $M$  は平坦 Riemann 多様体になる. 論文 [17] では, この仮定を弱めた場合を論じる予定である.

<sup>2</sup>このとき,  $(M, J, \omega)$  は Kähler であり,  $L$  には正則直線束の構造が入る.

## REFERENCES

1. J. E. Andersen, *Geometric quantization of symplectic manifolds with respect to reducible non-negative polarizations*, *Comm. Math. Phys.* **183** (1997), no. 2, 401–421.
2. V. I. Arnold, *Mathematical methods of classical mechanics*, second ed., Graduate texts in Mathematics, vol. 60, Springer-Verlag, New York, 1989.
3. L. Bieberbach, *über die Bewegungsgruppen der Euklidischen Räume*, *Math. Ann.* **70** (1911), no. 3, 297–336.
4. ———, *über die Bewegungsgruppen der Euklidischen Räume (Zweite Abhandlung.) Die Gruppen mit einem endlichen Fundamentalbereich*, *Math. Ann.* **72** (1912), no. 3, 400–412.
5. V. Danilov, *The geometry of toric varieties (Russian)*, *Uspekhi Mat. Nauk* **33** (1978), no. 2, 85–134, English translation: *Russian Math. Surveys* **33** (1978), no. 2, 97–154.
6. J. J. Duistermaat, *On global action-angle coordinates*, *Comm. Pure Appl. Math.* **33** (1980), no. 6, 687–706.
7. H. Fujita, M. Furuta, and T. Yoshida, *Torus fibrations and localization of index I*, *J. Math. Sci. Univ. Tokyo* **17** (2010), no. 1, 1–26.
8. ———, *Torus fibrations and localization of index II*, *Comm. Math. Phys.* **326** (2014), no. 3, 585–633.
9. ———, *Torus fibrations and localization of index III*, *Comm. Math. Phys.* **327** (2014), no. 3, 665–689.
10. M. D. Grossberg and Y. Karshon, *Equivariant index and the moment map for completely integrable torus actions*, *Adv. Math.* **133** (1998), no. 2, 185–223.
11. V. Guillemin and S. Sternberg, *Geometric quantization and multiplicities of group representations*, *Invent. Math.* **67** (1982), no. 3, 515–538.
12. L. Jeffrey and J. Weitsman, *Bohr-Sommerfeld orbits in the moduli space of flat connections and the Verlinde dimension formula*, *Comm. Math. Phys.* **150** (1992), no. 3, 593–630.
13. Y. Kamiyama, *The cohomology of spatial polygon spaces with anticanonical sheaf*, *Int. J. Appl. Math.* **3** (2000), no. 3, 339–343.
14. Y. Karshon and S. Tolman, *The moment map and line bundles over presymplectic toric manifolds*, *J. Differential Geom.* **38** (1993), no. 3, 465–484.
15. M. Masuda, *Unitary toric manifolds, multi-fans, and equivariant index*, *Tohoku Math. J.* **51** (1999), no. 2, 237–265.
16. K. N. Mishachev, *The classification of lagrangian bundles over surface*, *Differential Geom. Appl.* **6** (1996), no. 4, 301–320.
17. T. Yoshida, *Adiabatic limits, theta functions, and geometric quantization*, in preparation.
18. ———, *On counting lattice points and Riemann-Roch numbers in Lagrangian fibrations*, Talk at University of Toronto, January 2008.

DEPARTMENT OF MATHEMATICS, SCHOOL OF SCIENCE AND TECHNOLOGY, MEIJI UNIVERSITY,  
 1-1-1 HIGASHIMITA, TAMA-KU, KAWASAKI, 214-8571, JAPAN  
*E-mail address:* takahiko@meiji.ac.jp